

1 小論文とは何かを知ろう

1 はじめに

いまから小論文を学び始める人々には、小論文って何からやればいいのかわからない、何を書いてよいかわからない、大変そうだなあ、面倒だなあ……、といった思いを持っている人も多いと思います（そうでない人にはゴメンなさい）。確かに、文章を書くことはけっこうなことではないし、他の教科と違って学習の手順も漠然として見えにくく、不安ばかりが膨らむ科目です。短期間で飛躍的に実力が伸びる、ということもなかなか期待できません。

でも、この講座を通じて少しずつでも着実に努力を積み重ねていくなら、必ず何かを得ることを保証します。それが何であるのかは、小論文という科目の特性上、君たち一人一人で異なります。もちろん志望大学合格は、誰にとってもその何かの一つになりますが。そして、単に合格にとどまらない成果が潜在していることを、最初に強調しておきます。君たちが手に入れるのは、自分を見る目であり、社会を見る目であり、自分自身の「可能性」の広がりなのです。

◆なぜ「小論文試験」なのか

では、そもそも小論文試験は何の目的で行われるのでしょうか。言い古されたことではありますが、それは、従来の教科試験の限界が明らかになったからにはかなりません。

学生の「思考力」「表現力」の低下はかなり以前から指摘されるようになったことであり、実際、大学の授業の中心をなすべき「ゼミ」が有効に機能しなかつたり、レポートや論文への取り組み方のわからない学生が増加したりする事態に、大学の先生は頭を悩ませるようになりまし。入試制度のせいだ、という批判はあちこちで聞かれますが、単に制度の問題ではありませんし、教師や大学など誰かのせいには解決す

る類の問題ではありません。また、一概に教科試験が悪いとも言えません。実際、大学とは研究機関なのであり、その研究は高度に専門化し、日々進展していますから、大学で学ぶためには高校で各教科の学力をしっかりと養っておくことも不可欠です。しかし、競争の激化が受験勉強のマニユアル化を招いたことも確かでしょう。

こうした状況を打開するために、大学は入学試験にさまざまな工夫を凝らし、自分で考える力（マニユアル的ではない真の対応力）を見る試験によって、他者に自分の考えを的確に表現する力を持った学生を選ぶようになってきたのです。面接もその一つですし、小論文がこれほど広まったのも、（最善とは言えなくとも）よい方法だと考えられているからでしょう。実際、小論文試験で合格した学生は、大学入学後も自主性があつて積極的に学ぶ傾向がある、という評価も出てきているのです。それはやはり、先に示したように、小論文を通じて得た成果が生きてくるからではないでしょうか。

2 小論文とは何か

◆「作文」との違い

小論文に初めて取り組む人がまず頭を悩ませるのは、「論理的に書け」「作文とは違う」という注文でしょう。「論理的ってどういうこと？」「作文とどこが違うの？」…。この疑問はもつともなもので、例えば国語の時間に「論理的な表現のための言葉づかいとは」といった教わり方をした人は、日本では少ないでしょう。

定義づけの違いは明示しにくいですが、「作文」は文章表現そのものの魅力、つまり印象的な表現や書き手の感性の豊かさを感じ取ること、比重が置かれていると言つてよいでしょう。もちろん「小論文」で

も文章表現は重要ですが、「作文」で効果を持つ比喩表現のような凝った言い回しは必要としません。

作文的なものの言い方を出発点にして考えてみましょう。小さな子どもの作文にもよく見られるタイプの文は、次のようなものです。

「僕は文章を書くのがきらいだ。」

確かに自分の思ったことを言葉に表した文ですが、そこに示される内容はまったくの個人的事柄に過ぎません。ただし、小さな子どもが主にこうした表現に偏るのは自然なこと、これは自分を客観的に見るのがまだできない（＝対象化できない）時期の特徴と考えられるようです。しかし、読み手に自分の感じたこと、考えたことを理解してもらう、納得してもらうためには、少なくとも「なぜきらいなのか」という根拠を示す必要があるでしょう。もともとこの例の場合、「面倒だから」などという根拠を示したところでやはり個人的事情に過ぎませんから、この内容で「論理的」に書くのはやや無理がありそうですね。では次のような文はどうでしょう。

「文章を書くのは難しいと思う。」

これなら自分の考えを読み手と共有する接点も見つけられそうです。例えば、

「文章を書くのは難しいと思う。なぜなら、頭に思い描いた内容を完全に言葉に置き換えることはできないからだ。」

これが根拠の示された文です。

1 小論文とは何かを知ろう

論理的に書くとは、こうした論じる際の根拠、すなわち「論拠」の提示とともに自分の考えを述べることで最大のポイントであり、小論文はこの「論拠」が不可欠である点で「作文」と大きく異なるのです。

◆論拠を示すためには

では、上の文章において、「なぜなら」以下の記述が導かれるためには何が必要でしょう。簡単に言ってしまうえば、「どういう点に難しさがあるのか」という「問い」が先に存在しなければなりません。そして、その「問い」そのものを追究していくことが、「論理的に書く」こと、つまり小論文の鍵を握っているのです。「どこが難しいのか」という「問い」からさらに絞り込んでみると、

「文章を書くという作業とはどういうことか」

「それは自分の考えを言葉に置き換える作業だ」

「では言葉は自分の考えをそのまま映せるものなのだろうか」

といったように進んでいくかもしれません。「論拠」を示した文章の背後には、こうした「問い」がさまざまに積み重ねられているのです。したがって、君たちが今後小論文を通して何かを考え、それを文章化する際にもっとも重要なのは、この「問い」をいかに適切に導き出し、それをどれだけ自分のものとして追究できるかという点なのです。

当然ながら、小論文問題で与えられるようなさまざまな対象について自分から疑問を持つことができれば、「問い」は生まれません。とりわけ、社会において「常識」とされていることや、自分でも「当たり前」と思っていることを疑ってみることが肝心です。ここではひとまず、自分の考えたこと（書いたこと）を疑ってみよう、とすすめておきます。自分自身を問い直すことの重要性は、この講義でもこれから随所に出てくることになるはずです。

3 小論文の形式・様式を知る

小論文が「自分の考え」を論理的に述べるものだという点を先に述べました。では、それを実際に解答の形にしていくなめには、どうしたらよいでしょう。ここでは、小論文を形にするための要点について概説することになります。

◆小論文の基本は「三要素」

先に、小論文には「論拠」が必要であり、そのためには「問い」が存在しなければならぬことを確認しました。これに加えて、「答え」つまり「主張・見解」が必要であることは言うまでもありません。ということは、**小論文を構成するのは「問い」「答え」そして「論拠」の三要素だ、ということになります。**

「問い」は考察の出発点であり、論述の中心的内容（＝主題）を方向づけるものになります。自分で提示した「問い」に従って考察を進め、その小論文で証明しようとする中心的な問題点を引き出すことが必要です。この「問い」によって提示される考察対象を「論点」と言います。

たいていの場合、小論文問題（つまり設問文と課題文）が示す考察対象の範囲はある程度の広がりがあり、漠然としていることさえあります。「自然と人間」「自由とは何か」などといった設問の場合、特に考察範囲が広くなります。八〇〇字、一〇〇〇字といった限られた字数で考えを展開するには、対象が大きすぎるのです。したがって、設問文（および課題文）をもとに考えられるさまざまな問題提起を自分なりに挙げてみて吟味し、絞り込む作業が必要となってきます。そして、**小論文の制限字数の範囲で論述できる問題点は一つだけだと考えてよいでしょう。**あれもこれもと問題点を取り上げても、それについて十分に論じる、つまり自分の考えとその根拠を十分に提示することは不可能だということ

とを、しっかりと意識しておいてください。

「答え」とは、問いに対して自分で提示する「主張・見解」のことです。ここでは、自分なりの価値判断・考えた結論が、読み手に対して明確に伝わるようにしなければなりません。読み手に遠慮するあまり遠回しな表現ばかりになったり、推測・推量としてしか「答え」を示さないのでは、自分の立てた「問い」から逃げたことになります（もちろん、必ずしも断定できない事柄も多く存在しますが）。

そうした結論にならないためにも重要なのが、「論拠」を考えるプロセスです。「考察」とは、この「論拠」を十分に練り上げていくプロセスと行ってよいでしょう。

「問い」⇨これから自分が論じていく問題点を絞り込む

「答え」⇨「問い」に関する自分の主張や見解

「論拠」⇨自分の提示した主張や見解について、なぜそう言えるのかを説明する理由づけ

◆三要素を自在に構成する

この「問い」「答え」「論拠」の三要素を答案として構成するわけですが、実際の論述にあたっては、その構成順序はさまざまなバリエーションが考えられます。例えば、

〈問いの提示〉⇨〈論拠の提示〉⇨〈答え⇨主張・見解の提示〉

という順序がオーソドックスですが、「論拠」の提示では、具体例や課題文の読解などを通じた「考察」について、字数を費やして述べる

ことになります。したがって、はじめのうちは、その論がどのような答えにたどり着くのか見通しが立ちにくくなりがちです。そうした場合、次のような構成も考えられます。

〈問いの提示〉↓〈主張・見解の提示〉↓〈論拠の提示〉

この構成の利点は、読み手に論全体の主旨が伝わりやすいことと、書く側の君たちにとっても論の方向を確認しやすいことが挙げられます。ただ、字数が多くなるとかえって最後のまとまりに欠ける恐れも生じてきますので、

〈問いの提示〉↓〈主張・見解の提示〉↓〈論拠の提示〉↓〈主張・見解の再確認〉

という四段階のプロセスで構成するとよいでしょう。こうなると、そのまま標準的な四段落構成にすることができるようになります。

中には三〇〇字、四〇〇字といった短い字数で論述させるものも見られ、また「問い」が設問であらかじめ絞られている場合もあります。そうした場合は、

〈主張・見解の提示〉↓〈論拠の提示〉

あるいは

〈論拠の提示〉↓〈主張・見解の提示〉

というシンプルな構成がよいでしょう。

構成に関しては、こうしなければいけないと固く考えるのではなく、場合にに応じて自分の発想と論述内容、強調したい部分などを、読み手に

的確かつ自然に伝えられるように、柔軟に対応していくことを目指してください。

◆「構成がどこかへいってしまおう……」——そんなときは

論理的構成が大切だとわかってはいても、実際に書き進めていくとどうにも話がそれていってしまう。最後になって、結論が問題の要求からそれていることに気づく。——こうした声もよく寄せられます。

簡単に言えば、それは「結論が見えないまま書き始めたから」にほかなりません。もちろん、結論とは考えを進めていくうちに出るものであって、先に存在するものではありません。したがって、十分に考えてから書き始める必要があるのは当然です。

そうはいつてもなかなか思うようにいかないのが、「考える」という作業。そこで、このような悩みを感じた人は、問いに対する「とりあえずの結論」をまず用意し、それにつながるように問題提起を工夫したり、具体例を選んだりする作業を行ってみましょう。この際、結論が浅いのは、という心配が起ります。「心配ない」と思った人は、はじめから出直すべし！。しかし、ひとまずは、自分が見定めた「とりあえずの結論」にのっとって、小論文全体を構成するのです。

これによって、「構成を見失う」ことは防げます。また、「問い」「結論」「論拠を示すための具体的考察」といったプロセスを自覚的に積むことによって、どの部分について考えが足りないか、はじめに用意した結論のどこに問題があるのか、といった点が自分自身で見えてくるのです。ここまで来たら、もう一度「結論」を練り直しましょう。深みのある「問い」が導かれて、小論文の充実度は飛躍的に高まっていきます。

結論を見据えた構成をあらかじめ考えてから書き始めること

4 「考えを伝える」テクニック

◆見知らぬ他者へ伝える

「小論文」が基本的に「作文」と異なることは述べました。その違いから導かれる小論文のもっとも重要な性質は、「自分の考えを他者に伝え、理解してもらう」ということです。詩や随筆などの場合、その作品が自分の趣味・感性に合わなければ、内容を理解するなど到底できないうとさえ思うことでしょうし、何とか理解しようとしても無理を感じることがあります。そうした場合、読み手にとっては、自分なりの何らかの「解釈」は可能であっても「わかった」とは言えないのです。

しかし、小論文とは、読み手にそうした「解釈」を求めるようなものであってはならないのです。自分の考え（主張や見解）ができる限りの確に読み手に伝わることを目指さねばなりません。論理構成を明確にし、適切な表現も備わっていないければ、見知らぬ他者を説得することは難しくなってしまいます。

◆自分の体験は大切な出発点

「小論文では個人的な体験を書いてはいけない」、と思っている人がいます。その一方で、個人的な体験をだらだらと書き連ねただけの内容も、特に小論文初學者の答案では頻繁に見受けられます。

そのどちらにも誤りなのだということを、はっきり意識しておいてください。自分自身の体験について話をするのと、伝聞に基づいて話をするのとでは、話の魅力も説得力もおおいに変わってきます。小論文においても、この点は同様です。問題になるのは、「わたしの体験」が、その小論文問題で考えるべき論点とどう関わってくるかという点です。また、その「わたしの体験」の中に他者と共有できる何かが含まれているのか、より広げて言えば、人間一般の問題として共有できる何かが含ま

れているか、ということが重要です。個人的な体験を書くことが、あくまでも個人的にしか意味を持たない場合、それは出題者や採点者と問題意識を共有することにはなりません。個人的な体験を通して示すことのできる「分析」や、君ならではの「視点」などが読み手に共有されるとき、それは非常に有効な論じ方となるのです。

小論文では、提示された一つの問題を出題者（採点者）と共有しつつも、君が論述する答案の内容は、出題者（採点者）にとって新たな発見となり、興味を引くことが求められます。ということは、読み手にとって未知の、君個人の体験をうまく盛り込めれば、それは大変すばらしいことなのです。

◆「……すべき」論の危険性

社会問題などを正面から取り上げた問題の場合、やってしまいがちなのが「○○すべきである」という主張のしかたです。もちろん、それ自体が「正しくない」わけではありません。例えば「私たちはみな仲良くすべきである」という主張自体は、ごく正当なもので、文句のつけようもないように思えることでしょう。

「しかし」と、ここでいったん立ち止まって考えてみましょう。「仲良くすべき」であるのは確かなのだけれども、現実にはそう簡単に仲良くできないからこそ、この社会には数多くの問題が存在するのではないのでしょうか。まさに「言うは易し」です。したがって、八〇〇字もの字数を費やして結局「私たちは仲良くすべきだ」という以上の内容を何も示していない答案は、読み手にとって得るものがありません。空虚な、物足りない印象しか与えない答案では、到底合格点をもらえるはずがないのです。

◆「内容」か、それとも「表現」か

さて、ここまで読んできて、小論文では内容を優先すべきか、表現（文章力）を優先すべきか、という点で悩む人も出てきたかもしれません。

結論から言えば、「両方重要」であることに変わりありませんし、合格できる答案とは、この両者のバランスが取れている答案にほかなりません。表現力（文章力）とは国語力に負うもので、正しい表記・表現で論述するためには、現代文の学習や読書を通じて言語感覚を養うことが重要です。内容の充実は、それと並行して考えていくべきものであり、言葉を扱う能力が高まると考える力も向上するという相互作用もあるのです。したがって「内容」と「表現」のどちらが先ということとはまったくないと考えてください。

5 基本的な約束ごとのあれこれ

本章の終わりとして、小論文を書く上での基本的な約束ごとのうちから、特に繰り返し確認してほしい事柄を簡単にまとめておきます。「当たり前じゃないか」と感じる項目も多いでしょうが、その「当たり前」がおろそかにされがちなのは、これまでの指導経験から明言できます。これからも、この講義はもちろん、解答解説でも繰り返し指摘することになります。しつこいと思わずに確認してください。ルールを知らなければゲームやスポーツに参加できないように、「入試」という決められた土俵に上がるためには不可欠な事柄ばかりなのです。

形式面について

◆表記は正しく

誤字・脱字は「皆無」であることを目指しましょう。注意すれば直せるものですし、日頃から辞書で確認する習慣を持つことは国語力の向上にもつながります。小論文も学力をはかる試験の一つであることを忘れ

ないでください。

◆記号（符号）をむやみに用いない

例えば「！」「？」「……」「——」など。絶対に用いてはいけないわけではありませんが、そうしたニュアンス（強調・疑問・留保など）をあくまでも「言葉」で表現するよう努めることが、論理的文章の基本です。君たちの答案でこうした記号が用いられているときは、気持ちばかりが先走ってしまったたり、文章表現に凝り過ぎたり、という場合が多いようです。

◆段落分けを適切に行う

先に触れたように、小論文とは、「主張・見解」「論拠」といった複数の要素から成り立つものです。それを読み手に明確に表現するためにも段落分けは欠かせません。段落分けをしていない小論文は入試では採点の対象になりません。もともと、二〇〇字、三〇〇字などと制限字数が少ない場合には例外もあります。

表現面について

◆文末表現を統一する

文末表現は「だ・である」調で統一するのが基本です。「です・ます」調を混ぜた答案が見受けられますが、これはいけません。「だ・である」調によって採点者に悪い印象を与えることを心配する人もいますが、そのようなことはまったくありません。

◆呼応を正しく

「私は……」と書き始めているのにそれに対応する述語がない文や、被修飾部がどこなのかわからない修飾表現など、「呼応」がおかしな文も頻繁に見受けられます。言うまでもなく、どんなに長い「文章」もその基本は一つ一つの「文」なのです。その文の構造がおかしくならな

いようにすることが重要です。

◆「悪い」「あつた」「おぼろげな」「あつた表現の使い方」
注意point

これも絶対にいけないということではありません。ただ、主張を明確にすべき文章であまいさを残すことは、読み手への訴えかけも損なわれがちになりますし、何より「考える」ことからの逃げ道を作りやすい、ということとは十分意識しておきましょう。その点を意識した使い方ができれば評価を下げることはありませんが、それには十分に訓練された文章力が必要となります。

◆「極端に長い」「文」を書かない

どの程度が「長い」かははっきり決められるものではありませんが、一つの文が二〇〇字にも及ぶような書き方は、読み手の理解を妨げることになり、悪文になりやすいものです。極端な場合は、一つの文⇨一つの段落になっているものさえ見受けられますが、小論文とは読み手のための文章であることをくれぐれも忘れてはいけません。

さて、そこで……

「端正な、しかも問題に応える熱意と力を感じさせる文章」

これを目指して自分自身を磨いていきましょう。

ZTAJA1-Z1A1-01



悲しみにつぐら

3月

添削問題

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

※著作権処理の都合上、文章は掲載しません。

(100点)

※著作権処理の都合上、文章は掲載しません。

*注 トランキライザー：精神安定剤

問一 これまでにあなた自身が体験した傍線部のような思いを、Bさんの体験と比較しながら二〇〇字以内で述べなさい。

(三〇点)

問二 問一を踏まえながら、他者の「悲哀の心理」を理解することについて、あなたが考えるところを六〇〇字以内で論じな

さい。

(七〇点)

(小此木啓吾『対象喪失——悲しむということ』より)

ZTAJA1-Z1C1-01

悲しみについて

3月

添削問題解答解説

一 問題

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

※著作権処理の都合上、文章は掲載しません。

(100点)

※著作権処理の都合上、文章は掲載しません。

(小此木啓吾『対象喪失——悲しむということ』より)

*注 トランキライザー…精神安定剤

問一 これまでにあなた自身が体験した傍線部のような思いを、Bさんの体験と比較しながら二〇〇字以内で述べなさい。

(三〇点)

問二 問一を踏まえながら、他者の「悲哀の心理」を理解することについて、あなたが考えるところを六〇〇字以内で論じなさい。

(七〇点)

出題意図

大学で学ぶ目的の一つは、人間を探求することである。どのようなジャンルの学問であれ、その根底には人間とその社会を見つめる視点があるものだ。大学入試で課される小論文は、君たちにその視点がどうかを問うための課題であると言ってよい。小論文のテーマに、人間の感情や感覚、心理が取り上げられることが多いのはそのためである。

そこで、今回の課題では、特に人間の「悲しみ」の心理にスポットを当て、そこから他者の心理を理解することの可能性を考えさせるものを出题した。人間の心のメカニズムについて関心を持つと同時に、それを社会全般の問題として考えられるよう、視野の拡大を図ってみたい。

出典紹介

小此木啓吾『対象喪失 悲しむということ』（中公新書 一九七九年）より、第六章の一部を抜粋。

小此木啓吾は一九三〇年東京生まれ。慶應義塾大学医学部を卒業、同大学医学部助教授、東京国際大学人間社会学部教授などを務めたが、二〇〇三年に死去。専門は精神医学、精神分析学。日本におけるフロイト研究や精神分析学の第一人者で、精神分析を日本の社会一般に紹介したことで知られる。主な著書に、「モラトリアム人間」という概念を提示した『モラトリアム人間の時代』（中央公論社、一九七八年）、現代日本人の心理構造の変化を詳しく解き明かした『現代人の心理構

造』（日本放送出版協会、一九八六年）がある。この『対象喪失 悲しむということ』は、「愛情・依存の対象であった対象を失うことによる」悲しみをどう悲しむかという、人間にとって永遠の課題とも言える心理プロセスを、「読者とともに辿ることを目的にして」書かれた本。筆者が医療の現場で実際に体験した具体的事例が数多く提示されており、諸君にも読みやすいと思う。

設問研究

1 設問要求の把握と課題文の理解

小論文の勉強というと、「文章を書く技術を磨くこと」と単純に思いがちだが、書く作業以前にまず必要になるのが、与えられた題材（課題文・資料など）をしっかりと読み解くことである。課題文読解型の小論文で、君たちが論じるべきことは、課題文の筆者が最も力を入れて論じている事柄や問題についての、君たちの意見であるからだ。自分では「考えたことをうまく文章にできた」と自信满满でいても、

その論点が課題文の内容と無関係であったり、関係があっても枝葉の部分にこだわっていたりするのは、高い評価は得られない。そうならないためにも、まず次の二点を心がけてもらいたい。

- (1) 設問文をよく読み、何を論述すべきかという要求事項と、課題文読解の方向性を把握する。

今回の課題の設問は、「これまでにあなた自身が経験した傍線部のような思いを……述べなさい」という問一と、「他者の『悲哀の心理』を理解することについて……論じなさい」という問二の二問から

ZTAJA1-Z1C1-05

成り立っている。このことから、課題文の主題は他者の「悲哀の心理」とその理解についてなのだろうと見当がつけられる。

(2) (1)で得た情報をもとに課題文を読み、その中心となる内容(主題)をしっかりと把握する。

課題文の構成・内容をまとめておこう。第一段落で、筆者は「現代社会における」社会意識と社会的コミュニケーションから(対象喪失―悲哀)という心理構造が排除され」ていること、その一方で「外的な出来事としての対象喪失現象」が「社会の裏面で目に見えぬ形で大規模に発生している」ことを指摘する。そして「この現代人における意識と存在の乖離^{かひり}の進行は、不気味である」と、筆者自身の基本的な問題意識を読者に示す。その後、第二―最終段落で、筆者は「悲しむ」人間の姿をBさんとT夫人の二人を素材として詳しく描写する。

Bさんは、夫に先立たれた直後に糖尿病を患って視力が衰え、また脳卒中で手足が麻痺してしまった。病院に入院したBさんは周囲の人々を誰彼かまわずつかまえては自分の不安と悲哀を訴えて回るが、迷惑がられるばかりである。Bさんと面接すると、彼女は「どうして私ばかり……」と喪失の悲しみと周囲の無理解への嘆きを泣いて訴える(ただし、そうやって自分の悲しみを言葉にして人に語ったとき、Bさんは「おとなの心」をとりもどしていた)。T夫人は、母を亡くし、また子宮筋腫の手術で子宮を失うが、家族は彼女の悲しみにまるで共感を示そうとしない。

二者に共通するのは、愛情や依存の対象としていた伴侶や肉親、自身の身体的機能を喪失したこと、しかしその喪失の悲しみを受け止める理解する人のいない「悲哀の排除された世界」で孤独に生活している

ことである。つまり、筆者がここで主題としているのは、悲しみの存在に無関心で、悲しむ人々を理解しない現代人・現代社会のあり方についてなのだ。今回の課題に取り組むにはこの問題(危機)意識を把握・共有することが不可欠である。

2 問一への対処

課題文の主題を押さえたら、次にそれについて考察を深めていこう。オリジナリテイのある論述を書くためには、自分の体験や見聞を生かした発想が欠かせない。今回の問一は、この発想のしかたを勉強してもらうために用意した準備体操の設問である(このような問いがないときにも、この作業は自主的に行わなければならない)。

さて、君たちは傍線部のような思いを実際に抱いたことがあるだろうか(ここでの「不幸な目」とは、大切なものを失った体験それ自体だけを指すのではなく、その悲しみが周囲に理解されない嘆きでもあることは、もうわかっていることと思う)。ここで次から次へ自分の体験を文章化できた人もいただろうが、多くの人は語るべきことはあるけれど、それを言葉にするのは意外に難しいという感想を持ったのではないか。体験は個人的なものだから、それを他者にわかってもらえるように説明するのはなかなか難しい。そこで、その個人的で特別な体験を他者にもわかるように一般化(抽象化・普遍化)して語る工夫が必要になる。

ここで「Bさんの体験と比較しながら」という要求が意味を持ってくる。自分の体験と他者の体験を比べてみることによって、君たちはおのずと自分自身(とその体験)を一步離れた立場から検討すること

になる。つまり自己を相対化する視点が生まれてくるのだ。自分の体験のどこが他の人と違い、どこが似ているのか。その異同はなぜ生じているのか。こういう疑問に一つ一つ丁寧に答えていくことよって、個別具体的な体験から他にも通じる一般的な要素が引き出せる。この分析の過程をきちんと示してまとめられた個人の体験談は、そこから導き出された結論にオリジナルな魅力と十分な説得力を与えてくれるだろう。

もつとも、七十歳のBさんとは違い、君たちは失ったものよりも、むしろまだ手に入れていないものの方に関心がある年頃であるかもしれない。「悲しい」体験はそれなりであるとしても、Bさんの思いと比較するにはほど遠いなあ、という感想を持った人も多いのではないかと。それならばそれでよい。そんな思いは未体験だ、まったく何も思いつかないという人がいたら、そこにポイントを当てよう。「体験がない」というのも、考えようによつては立派な自分の体験である。なぜBさんにあつて、自分にはないのか、と比較して考えていけばよい。あくまでも大事なのは自己を対象化して語る視点である。

3 問二への対処

問一を踏まえて、問二では「他者の『悲哀の心理』を理解すること」とについて、いよいよ「論じて」もらうことになる（今回のように、複数の小問が課された出題では、各設問の関連性を考えてみよう。出題者は、問一を問二へ至るステップとして設定している場合もあるからだ）。しかし、「他者の『悲哀の心理』を理解することについて」という要求は少し漠然としている。一体何を書いたらよいのだろうか。

最大のヒントを与えてくれるのはやはり課題文である。問一での作業によつて、課題文への理解はより深まったはずだ。ただし、いくら筆者の考えをよく理解できても、その要約や感想で終わってしまったのは小論文としての意味をなさない。課題文のポイントを踏まえつつも、「私はこう考える」という方向を打ち出すことが重要になる。

問一で見た自分の体験から深く納得できたところはあつたか、逆に違和感を覚えるところはなかつたか、ここをもっと詳しく説明してくれるればよいのにと不満に感じた点はなかつたか、ともう一度丁寧に考えてみてほしい。筆者の主張に触発されて出てきた、自分の素直な疑問を引き出し、そこを切り口にこれから自分が論じるべき対象を明らかにしよう。参考までに、その切り口になりそうな疑問（論点）をいくつか挙げておく。

・ BさんとT夫人、二つの具体例の間に違いはないか

身寄りのないBさんは、自分の対象喪失を語るうちに、「幼い子どものように人びとにまわりつく、(悲しみに)うろたえた」存在ではなくなつた。T夫人には家族がいるが、家族は誰一人彼女の悲しみに関心を持たない。彼女に残された道は、悲しみにこだわるような弱い心を捨て、「気楽な気分」にノックタ毎日を送る心掛けを身につける「ことだ」と言う。悲しみにとことんこだわるのと、悲しみから気を紛らわせることと、それぞれの結末はどのように考えられるか。

・ BさんともT夫人とも違う事例は考えられないか

BさんもT夫人も、自分の悲しみの理由を自覚しており、そのために「孤独であり、狂っているようにさえみえた」。もし自分で自分の悲しみを自覚できなかつたらどうなるか。

ZTAJA1-Z1C1-07

・他者の悲しみを理解しない人を、単純に「悪い」と言えるか

「陰気くさい話はよしてくれ」「深刻めいた話は嫌いよ」「ツカレルねえ」といったT夫人の夫や子ども言葉にむしろ共感を覚えるということはないか。好きな人、親しい人にこそ、相手を不快にさせないように、愚痴をこぼすまいとし、楽しい雰囲気共有できるような話題を選び心がけるといふこともあるのではないか。

また、悲しみを理解しない人々に、積極的な「悪意」があるわけではない。病院のソーシャルワーカーに見られるように、善意の発想から悲しみを現実から排除しようという考えを抱くこともある。T夫人の息子が母親を茶化すのも、ある意味母親の気分を軽くしてやろうという善意の表れだと考えられなくもない。

論点が定まったら、それに対する自分なりの主張・見解を提示する。その際には、筆者の主張に同意するにせよ、批判するにせよ、自分がどういう価値判断でその主張にたどり着いたのかを説明しなければならぬ。自分の意見は根拠とともに示されて、はじめて説得力を持つ。意見とその論拠が用意できたら、あとは構成を整えて終わりだ。適切な段落分けを行い、各段落間のつながり（論理展開）に注意して、〈論点の設定↓自分の主張・見解↓その根拠〉などの順序にまとめよう。

解説

【対象喪失 (object loss)】心理学、精神医学において「対象喪失」とは次のようなことを言う。①愛情・依存の対象の死や別離、②住み慣れた環境や地位、役割、故郷などからの別れ、③自分の誇りや理想、

所有物の喪失など。

【悲哀の仕事 (mourning work)】精神分析学者ボルビー (Bowlby, J) は、母親と引き離された幼児が示す反応を観察し、愛するものを失った人間のとる行動および心理は、抗議 (対象喪失に対する抗議と不安) ↓絶望と悲嘆 ↓離脱 (対象に向けていた関心や欲求の忘却) という段階で変化すると考えた。人間は愛情・依存の対象を失った現実をなかなか最初は受け入れられない。そこで、失った対象を悔やみ懐かしむことを何度も繰り返し、その対象と自分との関わりを追体験することによって、心の中を整理していく。そうした作業によって、はじめて現実を安らかに受け入れることが可能になる。

【悲哀の仕事の回避は何をもたらすか】喪失した対象と自分との関わりを追体験し、現実に直面することには苦痛が伴う。その苦痛から逃避したり、何らかの理由でその「悲哀の仕事」を段階を追って進められなかった人は、ときとして精神的活動に変調をきたす。精神分析学者リンデマン (Lindemann, E) は、「人は悲しむべき時に悲しまずにいると、delayed mourning (時期を逸した悲哀) を経験することになる」と述べている。悲しみに直面している人に対して表面的に励ましたり前進を促すことは「悲哀の仕事」を妨げることになり、悲しむ人々をかえって孤独にしまうのである。

【共感と思いやり行動】共感 (empathy) とは「他者の感情あるいは置かれている状況を認知し、同様の感情を共有すること」である。心理学者アイゼンバーグ (Eisenberg, N) らは共感と思いやり行動の関係について、次のように言っている。「自他の区別の概念が未発達な乳幼児は、あまりに激しい他者の悲しみに直面すると、それと自己の

ZTAJA1-Z1C1-08

感情を分けて保っていくことが難しくなり、他者に対して思いやりを示すよりは、むしろ嫌悪し拒否するという利己的行動を示すことが少なくない。」悲しみへの共感を適切な援助に結びつけるには、アイデンティティの確立がまず必要なのである。

【思いやり】の文化的背景】日米の十五歳から二四歳の青年を対象に「道に迷って困っている人を見たらどうするか」という質問をし、「声をかける」「尋ねられれば教える」「気にかけない」の選択肢から一つを選ばせると、アメリカ人青年の六割が「声をかける」を選択したのに対し、日本人青年の七割は「尋ねられれば教える」を選択したという実験結果がある。つまり、日本人の「思いやり」は、その気持ちはあっても積極的な行動に結びつきにくく、受身的になりがちなのである。このような日本人の行動は、自分の意志や価値判断に基づいて動くのではなく、他者の気持ちを汲み、他者の承認を得て動くことをよしとする日本人の自己のあり方と深い関連性を持つ。

解答例

例1

問一

健康にも家族にも恵まれている今の私には、Bさんと同じような体験はない。けれども、「どうして私ばかり」という気持ちには、覚えがある。小さいときに妹とケンカをして、一方的に自分ばかりが悪いことにされてしまったときの気持ちだ。そのときの私は、悪者にされたこと自体が悲しかったのではなく、自分の不満をうまく説明する言葉を知らなかったために、周囲の大人たちに取り合ってもらえなかったことが悲しかったのだと思う。

(二〇〇字)

問二

課題文で、Bさんがはじめ子供のような振る舞いを繰り返さなければならなかったのは、自分でも自分の気持ちが高なかわからなかったからだ。しかし、周囲に疎んじられても徹底して自己の感情の表出にこだわり続けたBさんは、最後に「悲哀の仕事をもにする」人、つまり悲哀を言葉にして表すための話し相手を得て、おとなの心をとりもどすことができた。

翻って自分について考えてみると、自分の悲しさを表すのに適した言葉が見当たらないのに気づく。そもそも悲しみや怒りといった激しい感情を表す言葉が、私や私の友人の会話にはほとんどでてこない。その代わりによく口をついてでてくるのが「ビミョー」だ。白黒をつけずあいまいな判断でものごとをやり過ぐす上で、「ビミョー」という言葉はとても使い勝手がよく便利なものだ。だが本当のところは、このソフトであいまいな言葉を用いることで、私たちは他人を傷つけたりすることを避けると同時に、自分の気持ちにも「悲しい」「悔しい」といった明確な輪郭を与えることを避けているの

例1について

問一では、Bさんと同列に語れるような体験を自分は持っていないという意識から出発し、その違いを考えていくなかから、「自分の感情をうまく説明できず、他者に伝えられない悲しさ」という一つの共通項を見出した。それを受けて、問二では、悲しみを表現する言葉の機能に焦点を当ててみた。

他者と自分の相互理解は、ふつう言葉を通じて行われる。もちろん親しい人間関係においては、いちいちこと細かに言わなくても「言外の意」を察してもらえらるが、そういう関係にはかり依存していると、「わかっているはず／わかってきているはず」という思い込みのなかで、互いのすれ違いが大きくなっていたり、自分でも自分の気持ちをいつのまにか見失ってしまうということが起こりかねないのではないだろうか。

この解答例では、考察の対象、その根拠ともに「自分」の体験をもとに書いてみた。自分に引きつけつつも、それを一歩突き放してみる論じ方を学んでもらいたい。

ではないか。

自分の悲しみを理解する言葉を持たない者が、他者の「悲哀の仕事をとみにする」とはできない。したがって、他者の悲しみを理解しようとするならば、まず自分の悲しみをじっくりと見つめ、自分の言葉で自分の心のなかに焼きつけることが必要であろう。

(一行二五字詰換算 六〇〇字)

例2

問一

中学時代に交通事故で大怪我を負ったことがある。後遺症で身体がなかなか思い通りに動かせないもどかしさや、進級が遅れそうな不安などで、私もBさんのように「どうして私ばかり」という気持ちに襲われた。家族や友人は、私が不安を口にするに「あまり思い詰めてはいけない」と事故の話題を避け、優しくしてくれたが、私の気持ちは完全にはわかってもらえなかったと思う。だが、自分一人で自分の気持ちを慰めることもまた難しい。

(二二〇〇字)

問二

「癒し」という言葉は、人が人によって癒されるというだけでなく、音楽や絵画、植物、飲み物など、人間以外のモノによって癒されるということも意味するようになってきた。そこには、心の傷は個人でケアすべきものであり、それを外から「理解してやろう」と干渉するのはお節介、とする考えがあるようだ。Bさんを人里離れた老人病院に転院させれば、彼女も落ちつくだろうという発想はこういうところに端を発しているだろう。

確かに、災害や犯罪、突然の事故にあって強い恐怖を体験した人々の、事件の記憶そのものからくる悲しみは、なかなか他者には理解できない個人的な事柄かもしれない。

例2について

問一では、病気で健康を失ったBさんの事例と関連させて、自分が交通事故にあったときの体験を取り上げ、その際に経験した周囲の反応などを、問二での考察につなげた。

最近では、家族でも友人でも、より淡泊なつきあい方が好まれるようになってきているようだ。恋人同士でも、つかず離れずでそれぞれに黙って何かをしているという関係が最もなごむという意見に共感を覚える人は多いと思う。例えば「癒し」という言葉の背景には、このように関わりの多い人間関係を煩わしいものとして、否定的なイメージで語る風潮がある。問二は、この現代的「癒し」観を、「他者の「悲哀」」を皆で共有しようという考え方と対極にあるものと位置づけ、他者の心に干渉しない「やさしさ」の負の側面について考察を深めた。

小論文は、常に「…ねばならぬ」「…するべきだ」という主張を最後に打ち出さなければならぬという

ZTAJA1-Z1C1-11

しかし、悲しみそれ自体は理解できないにしても、その悲しみを社会のなかに位置づけ、その人の置かれている状況を「理解しよう」とすることは必要だ。「思い出さないほうがよい」「寝た子を起こすな」という対処法は、一見「やさしさ」であるように映るが、被害者が現在抱えている社会生活上の困難と、そこからくる新たな悲しみを、同時に「ないことになってしまう」という危険を持っているからだ。

こう考えると、現代人が各自勝手に自分の「癒し」に没頭している状況は、所詮対症療法にすぎず、悲しみの根本的解決につながるばかりか、悲しむ人々が互いに「他者」のまま、孤独に打ち捨てられるという現象を、かえって助長するものになってしまうように思われる。

(二行二五字詰換算 六〇〇字)

ものではない。考察の素材として選んだ事象に対する自分なりの解釈・分析をきちんと示すことができれば、そこにおのずと独自の問題意識が表れ、論として十分成立するという点をぜひ参考にしてほしい。